

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770281

研究課題名(和文)古墳時代の銅鏡の集成と生産・流通・保有に関する総合的研究

研究課題名(英文)Collection and the General Study of Bronze Mirrors in Kofun Period

## 研究代表者

下垣 仁志(Shimogaki, Hitoshi)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：70467398

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：弥生・古墳時代の列島出土鏡の網羅的集成を実施し、データの精度・分量・実用度の点で、従来の集成を遙かに凌駕する集成を完成させた。

その上で、古墳時代の銅鏡に関する学史的・流通と保有の意味の闡明、倭製鏡の出現経緯、鏡の数量的研究、人骨と副葬鏡との相関関係、文献史と考古学からの鏡研究の摸索など、非常に多角的な視点からの研究を実施した。

本研究を通じて、資料面・研究視角面の双方において、列島の鏡研究に重要かつ新たな地平を切り開いた。

研究成果の概要(英文)：Firstly, I have made a corpus of bronze mirrors made or imported in Yayoi and Kofun period. This corpus exceeds old ones in quality, quantity and accuracy.

I carried out the study from a multidirectional viewpoint based on the corpus, such as an historical study on domestic mirrors in Kofun period, circulation and possession of bronze mirrors in the period, process of the appearance of domestic mirrors, statistical analysis of bronze mirrors, correlation of mirrors and human bones in burials, general analysis of bronze mirrors from documentation and archaeological date, and so on.

Through the study, I presented a lot of important viewpoints on the study of ancient bronze mirrors of Kofun period in Japanese archipelago.

研究分野：考古学

キーワード：銅鏡 倭製鏡 保有 流通

### 1. 研究開始当初の背景

銅鏡は弥生時代～古墳時代の列島の社会像及び政治的成長を解明する最重要の手掛かりであり、極めて多くの研究が蓄積されてきた。しかし、日々の発掘により新資料が追加されており、資料が古くなりつつある。研究視点も旧態依然としてきており、これでは古嚢に古酒を盛ることになりかねない。逆にいえば、今こそ新たな視点と資料から研究を推進し、刷新をはかるべき時期にきたといつてよい。

### 2. 研究の目的

上記の研究の現状及び限界を打破し、弥生・古墳時代の鏡研究に、ひいては当該期に関する政治・社会史研究を今日的視点から伐り拓くことが本研究の目的である。換言すれば、刷新された資料と方法論による鏡研究の今日的展望の構築こそ、本研究の主目的である。

本研究を推進することで、鏡研究のみならず弥生・古墳時代研究に重要な弾みをつけることが可能になる。ひいては日本考古学の強みである包括的資料の総合的かつ緻密な研究に立脚した成果を、広く国外へも発信してゆくことにもつながる。

### 3. 研究の方法

上記の目的を果たすため、まずは列島の弥生時代及び古墳時代の遺跡出土鏡を網羅的に集成した。なお、韓半島の倭製鏡(仿製鏡・倭鏡・国産鏡)および出土地不明の倭製鏡も集成に含めた。本研究および爾後の諸研究に活かすために、出土鏡・字名まで明記した出土地・出土遺跡の内容・所蔵ないし管理者・銘文・鏡式名・出典・重量・面径など、多様なデータを詳細に調べあげて記載することにした。

続いて上記のデータを踏まえて、弥生・古墳時代の鏡に関する多角的な分析を実施することにした。分析作業の中軸となるのは、当該資料の製作・流通(配布)・保有・副葬の多面的な究明であるが、そうした作業に加えて、古墳時代の銅鏡に関する学史的・倭製鏡の出現経緯、数量・重量的分析、人骨と副葬鏡との相関関係の解明、文献史と考古学からの分析の推進、出土鏡の出土鏡の動き、政権交替期の鏡の動態、古墳出現期における鏡の保有状況と古墳出現との関連性の追求など、非常に多様な分析視点を盛りこむことで、基礎資料だけでなく分析視角の面でも重要な遺産を学界に提供することを目指した。

### 4. 研究成果

研究成果はすこぶる大部のものになった。不遜を承知で言えば、科研費 3~4 回分くらいの成果が上がったのではないかと自負している。以下、(1) 基礎資料の集成、とそれに立脚した(2) 多角的分析に分けて成果を概述する。

(1) については、従来の列島出土鏡集成に 1000 面ほど新規資料を追加し、さらに精度・内容面で従来の集成をはるかに凌駕する成果を生み出した。

個人による作業のため、かなりの無理を強いられたが、統一的な基準を貫徹したうえで資料の集成・記載ができ、爾後の研究にこのうえない手掛かりを与えることができた。特に個別資料の位置づけを筆者分類・他氏分類に分けて記載したことは、今後の研究をかなり容易にするものと考えられる。

(2) については、10 前後の分析視点から多角的な分析を実施したので、それぞれ個別に成果を記す。

首長墓系譜と鏡保有の関係 について、首長墓系譜や古墳群における鏡の保有状況を、副葬・保有状況から捉えた。検討の結果、銅鏡とは集団の同一性(アイデンティティ)を担保する器物であったとの結論を導きだし、その意味の衰滅と制度支配の浸潤との相関関係を見出し、鏡の政治・社会史研究に新視点を打ち出した。

を補完する研究として、首長墓系譜論の学史的・研究史的研究を実施し、従来にない詳細な研究史をまとめた。今後の首長墓研究の重要なデータ源になりうるものである。

古墳出現前後の鏡保有 は と対になる分析で、古墳の登場と鏡保有の開始の軌一性を把握し、伝世鏡論と保有論に斬新な一視角を提示した。

倭製鏡の総合的研究史 では、研究の進捗がはかばかしくない倭製鏡研究に堅固な足場を与えるべく、長大な研究史を作製した。当該分野の従来の研究史の数十倍ほどの分量に膨れ上がり、長大になりすぎたきらいがあり、これでは以後の研究者の倭製鏡研究への意志を沮喪せしめるのではないかと危惧しないでもない。

倭製鏡の出現経緯 では、古墳時代の倭製鏡がいかなる背景で出現したのかを検討し、弥生時代の倭製鏡に新来の技術系譜が追加されつつも、倭人世界に根づいていた「龍」が重要な役割を果たしたとの新説を提起した。

副葬鏡と副葬人骨 では、被葬者の第一次情報である人骨と副葬鏡との関係を網羅的なデータ収集に基づいて検討し、基礎的なデータと知見を提示した。

史資料からみた鏡 では、『古事記』『日本書紀』『風土記』などの文献史料における鏡の動線と考古資料における鏡の動線との比較検討を行い、重要な基礎資料の収集と、

史料批判に根ざした新たな史資料融合の研究視点を示した。

政権交替期の鏡 では、政権交替期として学界の注目を集める古墳時代前期後半～中期前半の倭製鏡(および一部の中国製鏡)の動向を分析した。注目されつつも検討の甘い当該期の鏡研究に対して、少なからぬ貢献となりうる。

江戸期の鏡収集・研究 では、江戸期に古墳出土鏡がいかにかに保有・流通・記録されていたのかを広範に分析した。これまでほとんど手つかずであった分野を開拓した研究である。

倭製鏡の法量分析 では、倭製鏡の面径と重量を細かく分析した。特に重量分析は、これまでの検討が寡少なテーマであり、基礎的分析ではあるが価値がある。爾後の研究に活用できる。

以上のように、基礎資料・分析・解釈すべてにおいて、倭製鏡研究に重要な一歩を濃くしたと自負している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

下垣仁志、芝ヶ原古墳出土鏡小考、芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書、査読無、2014年、42-45頁

下垣仁志、政権交替論の現状と展望、古墳時代の考古学、査読無、9巻、2014年、50-63頁

アルフレッド・クローバー著(下垣仁志訳)、死者の処理、古代学研究、査読有、202巻、2014年、30-33頁

下垣仁志、鏡の保有と「首長墓系譜」、立命館大学考古学論集、査読無、6巻、2013年、VI、189-201頁

下垣仁志、青銅器からみた古墳時代成立過程、新資料で問う古墳時代成立過程とその意義発表要旨集、査読無、2013年、34-45頁

V.G.チャイルド著(下垣仁志訳)、都市革命、立命館大学考古学論集、査読無、6巻、2013年、529-540頁

[学会発表](計 7件)

下垣仁志、平安京前夜、大阪・京都の遺跡を読み解く、2015年6月8日、立命館大阪梅田キャンパス(大阪府大阪市)

下垣仁志、邪馬台国から大和政権へ、日本史を読みなおす<古代・中世編>、2015年4月13日、ラポール学園3F(京都府京都市)

下垣仁志、国家形成と器物保有、東アジアにおける倭世界の実態、2015年3月8日、国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)

下垣仁志、弥生「龍」の残映、芝ヶ原古墳と卑弥呼の時代、2014年8月9日、文化パルク城陽ふれあいホール(京都府城陽市)

下垣仁志、青銅器からみた古墳時代成立過程、考古学研究会関西例会、2013年11月30日、大阪歴史博物館(大阪府大阪市)

下垣仁志、日本古代「国家形成期」の時空観、日本的時空観の形成、2013年10月20日、国際日本文化研究センター(京都府京都市)

下垣仁志、五塚原古墳第3次・4次発掘調査、乙訓の文化遺産を守る会、2013年9月15日、寺戸公民館(京都府向日市)

[図書](計 3件)

下垣仁志、立命館大学文学部、古墳時代銅鏡の研究(平成25年～27年度科学研究費補助金(若手研究B)研究成果報告書第一分冊)、2016年、総700頁

下垣仁志、立命館大学文学部、列島出土鏡集成(平成25年～27年度科学研究費補助金(若手研究B)研究成果報告書第二分冊)、2016年、総491頁

B.G.トリッガー著(下垣仁志訳)、同成社、考古学的思考の歴史、2015年、総512頁

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

下垣 仁志 (Shimogaki, Hitoshi)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号: 70467398

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者 ( )

研究者番号：